

**ディエゴ結城の1615年8月2日付クラウディオ・アク  
アヴィーヴァ宛書簡(ARSI Jap.Sin.  
36.245r.-246v.) : ラテン語原文と注解**

著者名(日)	渡邊 顕彦
雑誌名	大妻比較文化 : 大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	14
ページ	94-112
発行年	2013
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00005681/">http://id.nii.ac.jp/1114/00005681/</a>



# ディエゴ結城の1615年8月2日付クラウディオ・アクアヴィーヴァ宛書簡 (ARSI Jap.Sin. 36.245r.-246v.) – ラテン語原文と注解

渡 邊 顕 彦

## はじめに

ラテン語は、ヨーロッパ文化全体の中で特別な位置を占めている。同言語はもともとインド・ヨーロッパ諸語のイタリック語派より生じたラティウム地方の方言で、使用圏も話者数も非常に限定されたものであったが、紀元前3世紀以降、ローマ市が一古代都市国家の枠を超えてその軍事的・政治的影響圏を拡大していくにつれ、地中海全体でギリシア語に並ぶ、多民族間で使用される共通語となっていった。帝政期には北はブリテン島から南はアフリカ大陸の地中海沿岸まで、西はイベリア半島から東は（少なくともラテン語を公用語としていた駐屯軍団を勘定に入れると）小アジアまでラテン語の響きは聞こえていたはずである。ただ古代も後期になり、帝国東西の分離が予期される頃になると、ラテン語の使用も地中海西部に限定されるようになる。更に中世初期には北アフリカへのアラブ・イスラム文化流入が生じるが、西ヨーロッパにおいてはカトリック教会がラテン語を守り続け、世俗界でも公文書等でラテン語の使用は一般的であった<sup>1</sup>。更に14世紀頃イタリアで始まったルネサンスは、知識人の間で「模範・規範としての古代」に対する憧憬を喚起させ、この風潮の言語使用における延長線上には古代ギリシア語の再受容と共に、ラテン語でも「ゴシック風の」野蛮な要素を排し、純粹かつ高貴な古典の文体を復活させようという試みが盛んとなっていったのである。その後紆余曲折あり、欧米社会におけるラテン語の使用比率は17世紀以降徐々に低下していき、特に産業革命以降、古典語教育の没落が顕著になってくるが<sup>2</sup>、20世紀初頭まで例えばドイツの大学で一部の卒業論文が古典ラテン語で書かれることはあった。さらに1990年代以降になってからは欧米でインターネットを通じたラテン語話者のラテン語を使った交流が再度盛んになりつつある<sup>3</sup>。

ラテン語はこのように西ヨーロッパにおいて時代・地域・民族を超えて教育・使用され続けてきたので、しばしばそれ自体があたかも（「文法が論理的である」等検証困難かつヨーロッパの中心性および優位性を補強するような理由づけと共に）ヨーロッパ文化および精

---

1 以上、古代～中世にかけてのラテン語についてはPalmer (1954) 3-205、風間 (1998) 9-24、逸身 (2000) 3-12等参照。

2 近代以降のヨーロッパにおけるラテン語使用については例えばIjsewijn (1990) 27-53、Waquet (2002) がくわしい。

3 例えばGarcia and Alonso Saiz (2006) 参照。

神の神髄を具現しているかのように言われることがこれまでにあった<sup>4</sup>。確かに同言語はロマンス諸語の祖語であるので、その様々な要素は後者に変容した形で受け継がれているし、ロマンス語でない英語やドイツ語も、一時期ヨーロッパの文化共通語であったフランス語からの間接的、そして近代ヨーロッパ全般の知識階級の初等教育で圧倒的な存在を保ち続けたラテン語からの直接的影響を色濃く受けてはいる。だが先にも述べたように、ラテン語が民衆語でもあった古代にはその使用圏は現在の西ヨーロッパに限定されていたわけでもまた（北欧等ローマ帝国外のヨーロッパ地域があるため）完全に重なっていたわけでもない。また、テレンティウス、アプレイウスや教父アウグスティヌス等、有名なラテン語作家で非ヨーロッパ出身の者も多数みられる。さらにルネサンス以降にも、アメリカ原住民やアフリカ系の人物が（あくまでも植民勢力によるヨーロッパ式教育の産物ではあるが）流暢なラテン語を運用していた事例が報告されている<sup>5</sup>。従って、ラテン語とヨーロッパ文化の間に様々な特別な繋がりがあることは否定できないが、だからといってラテン語の正しい理解や使用はヨーロッパ出身者やヨーロッパの言語が母語の者以外は不可能であるという見方も成り立たないのは明らかであろう。

だが現在の日本においても、これまで優れたラテン語の運用能力を示した日本人が複数いる<sup>6</sup>のにも関わらず、ヨーロッパ人にさえ学習困難なラテン語を日本人が使いこなせるわけがないというような消極的な意見あるいは態度<sup>7</sup>が未だよくみられることも事実である。そこで本稿では、日本におけるラテン語学習者の奮起を促すため、そしてキリシタン史学への若干の貢献も期待しつつ、安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した一日本人が作文したラテン語書簡の原文翻刻を、ラテン語中級～上級者向けの注解を付して呈する。なおこの書簡の手稿はローマのイエズス会文書館に収められており、その内容も部分的に他所で紹介されている<sup>8</sup>が、全文の翻刻が公開されるのは初めてである。

## 著者ディエゴ結城について

当書簡の著者ディエゴ結城（以下結城）は1574年頃四国で生まれ、1636年2月に大阪で

---

4 例えば Waquet (2002) 199-200、257-268 参照。

5 渡邊 (2012) 14 脚注 44-46 参照。

6 キリシタン時代は除いても、本邦初の西洋古典学専任教員（京都大学）でありラテン語で博士論文を執筆した田中秀央（菅原 (2005) 参照）、流暢な古典ラテン語で詩を多数発表した水野有庸（水野 (2009) 参照）、本項の参考文献で挙げられているキリシタン文化の研究成果もありラテン語で散文韻文も能くする原田裕司等の例がある。

7 直近の例はあえて言及を避けるが、少々古いものとしてはケーベルに日本人のラテン語習得の困難であることを訴えた西田幾多郎の例が挙げておく（西田 (1923) 32-33）。

8 チースリク (1995) 34-35 (v.18-39 の翻刻)、一三〇-一三一（同箇所翻訳）、原田 (1998B) 276-277（紹介）、チースリク (2004) 210-211（紹介および部分的翻訳）、結城 (2008) 60-64（紹介および部分的な翻訳）。

処刑されたと伝えられる、イエズス会所属の司祭である。カトリック教会内では彼は既に17世紀以降、他の殉教者達と共に顕彰の対象となっており<sup>9</sup>、2008年にはペトロ岐部カスイ等百八十数名の日本人キリシタン殉教者達と共に列福にあずかった<sup>10</sup>。一方日本側の資料調査は長く等閑に付されてきたが、21世紀に入ってから大きな進展があり、徳島県の地方史家の研究により従来謎であった彼の出自、家族関係、禁教下における潜伏活動、そして捕縛に至るまでの経緯が相当判明してきた。彼の事績について詳細は他の研究資料に譲るが、以下本項で取り上げる書簡に関連する事柄を中心に簡単に述べる。

1573年東方巡察師に任命されたイタリア出身のイエズス会士ヴァリニャーノは、よく知られているように日本における布教体制の脱植民地化・現地化の方針を打ち出し、その一環として日本人司祭（ならびに、少なくとも初期の構想では世俗の日本人カトリック教徒指導者層）養成のための初等教育機関としてセミナリヨを1580年に設立した。日本のセミナリヨの時間割や規則はヴァリニャーノ自身が書いたものが現存しているが、注目すべきなのは人文語学系の教育が日本語・日本文学とラテン語・ラテン文学のみに絞られていることである<sup>11</sup>。これは、日本語は現地における一般民衆への布教と権力者との交渉のため、他方ラテン語はカトリック教義の正確な理解と教会中央部との連絡のため必要であるとの認識によるものであった。そしてヴァリニャーノおよび彼を支えたヨーロッパ系・日本系のイエズス会関係者達はこの野心的なカリキュラム実現のため数々の教材を編纂し、かの天正少年使節を通して持ち込まれたグーテンベルグ式活版印刷機とその活用技術もこれら書物の頒布に活用された。このようにして日本のセミナリヨ向けに作られた教材は、ラテン語のもののみをとっても、基礎的な辞書や文法書だけでなく、キケロ演説集のような真っ当な古典、カトリックの伝説・教義等を擬古典ラテン語で叙述したもの、同じく擬古典ラテン語で天正少年使節にその長旅の経験を語らせたもの<sup>12</sup>等<sup>13</sup>、様々な事柄を、少年達の興味を惹くような多彩な形式で伝える工夫がされていたことがわかる。またヨーロッパで西洋古典を叩き込まれてきた外国人セミナリヨ教師達も生きた教科書としてこれら印刷物を補完していたと思われる。

そしてこのセミナリヨ設立と同じく現地布教指導者育成のために企画されたのがかの有名な天正少年使節なのであるが、この使節団がちょうどヨーロッパから帰路につくころの1586年、当時12歳だった結城はセミナリヨに入学した。先に述べたように彼の出自は以前

---

9 例えばCardim (1646) 221-222。

10 列福式公式記録集編纂委員会 (2009)。

11 以下セミナリヨの教育内容についてはチースリク (1965)、片岡 (1969)、桑原 (2009) 等が詳しい。

12 これについては特にBurnett (1996) 参照。

13 これら教材については尾原 (1998) 128-151 や、Laures Database<<http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/start/>>中の” I. The Jesuit Mission Press” 参照。



不明とされていたこともあったが、最近の研究調査により、足利家に連なる家系であったことが確実視されている<sup>14</sup>。イエズス会セミナリヨは社会的階層の高いものを選抜して受け入れる傾向にあったので、結城ディエゴも入学の際その家系が考慮されたと思われる。現在残っている記録によると入学直後、彼の成績は格段秀でてはいなかったらしいが、その後退学することなくセミナリヨでの学習を続け、1595年に卒業、イエズス会に入会を許され、国内の修練院とコレジヨで学習を続けた。やがて1601年、日本イエズス会と関係の深いマカオのコレジオに彼は送られ、中浦ジュリアン等複数の在外日本人神学生と共に研修を受けている。そうして長年の教育研修の末、帰国して30代になっていたディエゴ結城は、1604年頃から1614年のキリシタン追放までセミナリヨのラテン語教師および巡回説教師としての任務に従事していたらしい。また1613年に彼は副助祭に叙階されている。ちなみにこの頃も彼より若干年上のかつての天正少年使節達や使節随行員で同じくセミナリヨ教師を務めていたドゥラートとも交流があったと思われる。ただ結城自身、東アジアを離れることは終生なかった。

1614年暮れ、江戸幕府の発した禁教令により多数のキリシタンが国外に追放され、マカオとフィリピンへと散ったが結城はかの高山右近と同じく後者に行ったグループに属しており、当時のスペイン領フィリピンの首都、マニラに1616年半ばまで、1年半ほど滞在している。同地のイエズス会管区長レデスマが発1616年7月15日付けクラウディオ・アクアヴィーヴァ宛報告に結城がラテン語で言及されている箇所があるので以下引用する：

Pater Didacus Yuqui, natione Iaponius, vir probus et ministeriis deditus, operam dedit hominibus Iaponicis cum fructu et aedificatione. Paulo ante Iaponiam redit.<sup>15</sup>

当時マニラの日系人口は数千人に膨れ上がっていたので、ディエゴ結城は彼等の教導を行いつつ、追放された仲間達と協力して布教体制の復興も図っていたらしい。本稿の書簡はこの時期に書かれたもので、当時マニラにいた日本人カトリック司祭および神学生達が異郷で苦勞しながらも本国で再び花を咲かせる確固たる希望を持っていたことを伝えている。なお1615年春、書簡が書かれる数か月前に、ディエゴ結城は司祭に叙階されている。彼がイエズス会総長に直接送った本稿書簡にも、教会内で確たる立場を得た喜びと自信の

---

14 三木 (2007) 270-295。

15 Schütte (1975) 644-645の翻刻による。綴り、省略記号、句読点は現代風に直してある。またSchütte翻刻では[in] JaponiamとあるがIaponiaは島の名前とも解釈され得るので前置詞無しで方向を表して使われていることがある (ARSI Jap.Sin.18.I.76r.11)。ちなみにこのレデスマ書簡の文体はディエゴ結城のものとは好対照をなす事務的で簡素なものであり比較検討の対象となりうるかもしれない。

ようなものが垣間見えるのではないだろうか。

1616年7月、ほか2人の日本人修道士と共に結城ディエゴは日本に再上陸する。江戸時代初期、禁教体制が固められていく中、彼は潜伏しつつ近畿や中部地方のカトリック人口の教導に努め、その一端は1618年～1621年にかけて日本イエズス会がローマに送付した活動報告書にも紹介されている。また潜伏中の結城が1625年にローマのイエズス会総長顧問マスカレーニャスに向け発した書簡も現存しており<sup>16</sup>、内容は主に状況報告だが文体は本稿で紹介するものと同じく、流暢で正確な擬古典ラテン語である。ちなみにこの1625年の書簡の几帳面な筆跡は、本項の翻刻で〈m2〉と表記してあるものと同じであり、結城本人のものと断定してよい。

そしてこの最後の書簡の日付より10年ほど後、1636年から1637年にかけて、ディエゴ結城が処刑されたことが長崎在住のポルトガル人経由でローマに報告された。ただ当時の国外情報によると彼は大阪の山中で20年間隠遁生活を送った（しかも隠遁しながら何故か「磁石の様な力で」人々を惹きつけ続けた）末、暴君ダイフサマ（＝第3代将軍家光）の手に落ち、穴釣りの刑で死んだという可也漠然かつ神話じみたものであり、近年までこれを補完する資料が無いことが惜しまれていた。しかし21世紀に入ってから、徳島県の郷土史家三木計男氏の古文書調査により、ディエゴ結城こそ江戸時代の記録に登場する伴天連れうこ、またの名を不慶伴天連という人物であり、彼が刑死したのは近畿の大阪だが捕縛されたのは出身地と同じ四国の阿波であったこと、そして逮捕に至ったのも幕府および藩の執拗な追跡と地元関係者の密告が結びついたためであったことが判明した。また長く隠遁生活を送っていたという話もおそらくディエゴ結城自身が協力者を庇うためにした嘘の証言から生じており、実際は四国の親戚や潜伏教徒達の間を巡っていたであろうことも当時の状況から推測されている。さらにディエゴ結城の日本名が結城喜太郎であり、同人物が3代目阿波公方の義兄にあたることも家系図から確認され、彼自身が1614年の日本追放前に教材あるいは研究材料として筆記したと思しい『論語抄』手稿も東京の古書店で発見されたと報告されている<sup>17</sup>。これら様々な近年の調査結果から分かるのは、16～17世紀の日本人結城ディエゴが深いレベルでヨーロッパのみならず本国と東アジアの伝統文化に通じていたらしいことである。

## 原文テキスト

以下の翻刻はローマイエズス会文書館のMauro Brunello氏より送付いただいたARSI 36.245r-245v.の電子画像ファイルから筆者が読み取ったものに、同文書をローマで直接視認調査された原田裕司氏の数々の御指摘も加味してまとめたものである。両氏、特に原田

16 ARSI Jap.Sin.247r-247v.。原文翻刻および翻訳・解説が原田（1998B）275-284にある。

17 以上、三木（2007）が詳しい。

氏の御協力に深い感謝の念をささげる。間違いがあれば無論その責任は全て筆者のものである。

読み易いよう、p.(=pater, patris etc.)等の略号は全て書き出し、句読点、綴りと大文字・小文字は現代風に変えてある。

なお次2ページに、Brunello氏より送付いただいた電子画像を、ローマイエズス会文書館の許可(162号)を得て掲載する。



*Jacobus Yuquic Japonicus;*  
*Adiutor Capellani S. Subdiaconus;*  
*Die 14. Novembris Augusti 1615*  
*deponit de statu totius Ecclesiae Japonicae*

*Amsterdam Reverendis in Christo P.*  
*Claudio Ague Vrae Generali Soci-*  
*tatis Iesu S. P. O.*

*Stati de Ecclesia Japonica, quae hactenus fidei, multa occurrunt, admodum*  
*Reverende in Christo Pater: tamen nihil est, quo magis gaudeamus et an-*  
*tem, quam hoc. Illucit jamus Dei bonitati, ut non Christi vera*  
*Martyrum sanguine subacta, abominos hic anni, fata producat. E Chri-*  
*stianis pars iam Martyrum sui corporum morte processit meritorum suorum corona*  
*de Domino receptura: pars adhuc carcerum vinculis detinetur, ad meritorum titu-*  
*los ampliores tormentorum farditate proficiens: pars in huius exilio degit, habitura*  
*tot mercedis in celestibus praemij, quae nunc dies numerantur in penis. Reliqui in-*  
*recti in patria essent extra carceris, et custodiae, tamen eo seducti sunt no-*  
*striae, ut inde essent, non liceant. Verum, qui Christi gratia est, omni*  
*in tribulatione gloriatur, peccator in conspectu Domini non libenter, et pro-*  
*se operienter. Idcirco licet Ecclesia Japonica sit in tantis angustiarum reditu-*  
*git, noxiam tamen tranquillitatem est. Deo rogatis, in tranquillitatem: omnia*  
*bestia, curia praeterea. Vra reverentia. Nam (ut semel dicitur) Franciscani vi-*  
*am sui similibus aliam Ordinis fundit, in tanta eorum praedicatione, mi-*  
*clama se nactus occasum, nam, Franciscanum Ecclesiam Archiepiscopatus Ma-*  
*niliensis suscipiendi nihil non agunt, ut non sui corporis evadant. En-*  
*im enim praesentem Clericis, ut Excommunicatione nobis Provinciae, exco-*  
*munent, eliguntque annu, qui nullo spacio, perperam gereret. Clerici vero,*  
*ut non libenter, tunc eorum praedicatione, tunc praesentibus adducti, quod non*  
*testantur clari, paleis, ut ubi robor reiceretur, catenis retraheretur.*  
*Justare igitur in res ipsas tunc, omnia arbitror, nullumque, ha-*  
*bitum, illor, tunc eorum praedicatione, facta nuda causa corrigere, regni fac-*  
*um atque ipsorum, qui sui praesentibus agunt, benevolentiam eorum, fide-*  
*tere sui re causa despectu, fuisse in amorem saluti, libenter Ecclesiae*  
*relictae basiant. Quid glori! Excommunicationem a Provinciae, atque*  
*relictae, pro fuisse clari, dicitur praedicatione. B. Joannes obitum cum com-*  
*diatis Judaeorum a fide abierunt. Quod ita in res debet, existunt,*  
*ut praesentibus facta sit huius, quae ut praesentibus fide eorum libenter fide-*  
*tur inveniunt. Opus est enim Praedicationem in sua aduersa fortuna, suam*  
*omni praedicatione in sua aut dicitur, dicitur praesentibus: necdum Praedicationem*  
*in compessa est: quoniam tantum est, ut quod huius gereret, fide e-*  
*um praedicatione, ut reliqua Praedicationem fide praesentibus accideret, quae*  
*est in amorem fide Japonicae Ecclesiae commodi nihil praedicatione, plurimum*  
*atque fide: nec in huius. Sicut Christus Cum parva de reliqua atque, Igitur*  
*et in huius in celis Ecclesiae non eorum, alio se recipiunt, et fide*  
*et in huius exponunt praedicationem. Multi de praedicatione, quorum praedicationem*  
*ut reliqua amorem saluti praedicationem, diffundit, apud alios praedicationem*  
*libenter praedicationem. Quidam vero, licet in alios reliqua praesentibus bene-*  
*amant, nuntiandi tamen res Praedicationem praesentibus, illorum praesentibus agere, et in-*  
*tas in res huius praedicationem praedicationem. Quia alia acciderit, et exco-*  
*nuntiandi amorem praedicationem fide praedicationem in praedicationem praedicationem*

*Japonica*  
*Yuquic, religiosus iapon-*  
*xanika*



atq; potissimum, obiectis hinc sua confessionis, et Zacharias eximia  
 eisdem religioſis ſingulorum moleſtas adgeratibus. Ex dictis vel ſu-  
 aſſue paſſiſſima quarta ſeruari ſunt diſſimulanda. Verū diuina  
 diſcordia, unde capitis orig. Chriſtiani, poſiti ſchola pleneſſe ſolent  
 exiſtere. Atque opinio eſt inter religioſos diſſimilitudo, ac uice-  
 ſita. Ad uicem, et poſſeſſione ſola in Japona præſentia perſonam,  
 ac ſola præſentium uolunt, et diſſimilitudo, ſed etiam ſolus eſt  
 indiſſimilitudo, unde debet eſſe. Ad hæc uicetibus ordinem et in ſu-  
 aſſue reſta poſſibilitate, quæ uicetibus et diſſimilitudo ſola exiſti-  
 unt: Neque ut ipſa ſimilitudo hominibus conſiſt, et poſſibilitate ſola  
 ſola deſer, etq; Bonis facile poſſunt. Chriſtiani religioſum  
 nihil ab eorum diſſimilitudo, unde diſſimilitudo. Jam uero illud, quod Angli  
 nobis hominibus indiſſimilitudo uolunt, non facit ut dicam: uicetibus  
 ne Japona aliquando in poſſibilitatem adducatur: quodſi in animis in-  
 duxerit, hæc ut ſimilitudo in Japona uicetibus, non ſola (quod  
 onem Deum aretat) de Eccleſia Japonaſis, ſed etiam de Philippi-  
 num ſola, et de diſſimilitudo ſola poſſeſſione actum eſt ſola poſſibilitate.  
 Vana miſſum non ſola, quod in conſuetudine Japonaſis Eccleſia cadit ſola  
 tum eſt: conſuetudine uicetibus uicetibus. Tu poſſeſſione ſola in  
 Japonaſis conſuetudine, ut uicetibus et diſſimilitudo reſtaſſione, et poſ-  
 ſeſſione poſſeſſione ſola ſola anglican. Viciſſim cedat, quæſito aliquid  
 poſſibilitate uicetibus uicetibus caputur indiſſimilitudo. Deinde ego ſola  
 multi ſola, caput Roman cogitant. ſed quia id conſuetudo ſola non  
 poſſeſſione, ut ſola poſſeſſione in Japona ſola Philippiſis, atq; Theo-  
 logia operari, unde ſola conſuetudo poſſeſſione, poſſeſſione ſola uicetibus in ſola  
 tum. Ad hæc autem ſola et ſola multi poſſeſſione ſola, de ſola  
 poſſeſſione uicetibus quæ poſſeſſione poſſeſſione conſuetudo uicetibus. Etiam  
 amandunt Japonaſis magiſter eisdem nationis legibus, moribus, natura  
 interſe atq; amore hominibus ſola in ſola animos inſuſcit, et ma-  
 teria lingua inſuſcit uicetibus uicetibus ad poſſeſſione habere. Vale ſola  
 poſſeſſione, atq; hominibus, quæ ſola uicetibus ſola. quæ diſſimilitudo ſola  
 inſuſcit. Inter Japonaſis in Philippiſis poſſeſſione poſſeſſione ſola  
 ſola ſola adſeſſione, atq; ex animo obſeſſione. 4. Nov. Auguſt. 1615.  
 Marti.

Intermittit ſua

ſola minima

Jacobus yuſi

1                               〈m1〉 Admodum reverendo in Christo patri  
2                               Claudio Aquae Vivae Generali Socie-  
3                               tatis Iesu salutem plurimam dico.  
4 Etsi de ecclesia Iaponensi quae tibi scribam multa occurrunt, admodum  
5 reverende in Christo pater, tamen nihil est, quo magis gavisurum te arbi-  
6 tror, quam hoc: Placuit summae Dei bonitati, ut nova Christi vinea,  
7 martyrum sanguine madefacta, uberrimos his annis foetus produceret. E Chris-  
8 tianis pars iam martyrii sui consummatione 〈m2〉 praecessit, meritum suorum coronam  
9 de Domino receptura, 〈m1〉 pars adhuc carcerum vinculis detinetur, 〈m2〉 ad meritum titu-  
10 los ampliores tormentorum tarditate proficiens, 〈m1〉 pars in tristi exilio degit, 〈m2〉 habitura  
11 tot mercedes in caelestibus praemiis, quot nunc dies numerantur in poenis. Reliqui, 〈m1〉 ta-  
12 metsi in patria manent extra carceres et custodias, tamen eo redacti sunt mi-  
13 seriarum, ut unde vivant, non habeant. Verum, quae Dei gratia est, omnes  
14 in tribulatione gloriantur, pretiosam in conspectu Domini mortem libenter et promp-  
15 te opperientes. Itaque, licet ecclesia Iaponensis in tantas angustias redacta  
16 sit, maxima tamen tranquillitas est, Deo propitio, in tempestatibus. Omnia  
17 laeta, omnia grata; una re minus, nam (ut rem tibi dicam) Franciscani, una  
18 cum sui similibus alterius ordinis fratribus, in tanta rerum perturbatione, prae-  
19 claram se nactus occasionem rati Iaponensem Ecclesiam Archiepiscopatu Ma-  
20 niliensi subiciendi, nihil non egerunt, ut voti sui compotes evaderent. Pri-  
21 mum omnium persuaserant clericis, ut proepiscopatum nostro Provinciali abroga-  
22 rent, eligerentque alium, qui melius episcopi personam gereret. Clerici vero,  
23 ut sunt litterarum ignari, tum eorum precibus, tum promissis adducti, quid non  
24 tentarunt clam palamque, ut ordo noster reiceretur, ceterique retinerentur!  
25 Incitare igitur in nos infimam turbam, odia multitudinis inflammare, hos  
26 minis, illos terrere ignominiis, falsa invidiae causa confingere, aequè summo-  
27 rum atque infimorum, qui suas partes agerent, benevolentiam captare, flagi-  
28 tare suae ne causae deessent, servirent animorum saluti, labentisque ecclesiae  
29 rationem haberent. Quid plura? Excommunicationem a Provinciali latam nihil  
30 valere pro suggestu clamitare, distribuere piaculares Beatae Ioannae globulos cum co-  
31 dicillis indulgentiarum a fide alienarum, denique ita in nos debacchari coeperunt,  
32 ut propius factum sit nihil, quam ut septuaginta ferme annorum labores fundi-  
33 tus interierint. Oppidum enim Nagasaquiense, in tam adversa fortuna, summo  
34 omnium periculo, in duas erat divisum, distractum partes. Necdum schismatis fla-

35 ma compressa est, quamquam tantum abfuit, ut quae nostri gererent, boni cives minus  
36 probarent, ut reliquas religiosorum familias graviter accusarent, quae  
37 tot annorum spatio Iaponensi ecclesiae commodi nihil, incommodi plurimum  
38 attulissent, nec iniuria. Saepe Christiani, (ut pauca de multis attingam) quos  
39 ob iustas causas a caelesti eucharistiae mensa arcemus, alio se recipiunt, et sa-  
40 tis leviter excipiunt sacramentum. Multi de peccatis, quorum absolutionem,  
41 ut melius animorum saluti consulatur, differimus, apud alios sacerdotes non  
42 laboriose confitentur. Quidam vero, licet in alios religiosos non sint bene  
43 animati, movendi tamen nobis stomachi gratia, illorum partes agere, et cer-  
44 tas in nos habere simulant expostulationes. Quin etiam accidit, ut excom-  
45 municatus nominatim denuntiatus sese conferret in quorundam religiosorum fidem  
46 atque

ARSI Jap.Sin. 36.245v.

1 atque patrocinium, obiretque libere sacra confessionis et eucharistiae mysteria,  
2 eisdem religiosis scrupulorum molestias abigentibus. Ex dictis vel fa-  
3 cillime perspicitur, quantum perniciiei pariat disseminatorum verbi divini  
4 discordia, unde capitalis reipublicae Christianae pestis, schisma, plerumque solet  
5 exsistere. Atqui opinionum est inter religiosos dissimilitudo, non animo-  
6 rum. Ad unam et sinceram fidem in Iaponia praecipue promulgandam,  
7 non solum operariorum voluntas et benevolentia, sed etiam sensus atque  
8 indicium idem omnino debet esse. At haec varietas ordinum, eo in pa-  
9 tria nostra pestilentior, quo magis multiplices ethnicorum sectas expri-  
10 mit. Nempe, ex ipsa similitudine, hominibus ignaris et simplicibus per-  
11 suadere daemon atque bonzii facile possint, Christianam religionem  
12 nihil ab eorum disciplinis moribusque discrepare. Iam vero illud, quod Angli  
13 nostris hominibus identidem inculcant, non faciam ut dicam. Vereor tamen,  
14 ne imperator aliquando in suspicionem adducatur. Quodsi in animum in-  
15 duxerit, fratres ut speculatores in Iaponiam venire, non solum (quod  
16 omen Deus avertat!) de ecclesia Iaponensi, sed etiam de Philippina-  
17 rum statu et de missione Sinarum prorsus actum esse tibi persuadeto.  
18 Unum missum non faciam, quod in commune Iaponensis ecclesiae cedat bo-  
19 num. Seminarium Iaponense propter persecutionis procellas paene dissolu-  
20 tum est; convictores numerat vix viginti. Tu, pro tua singulari in  
21 Iaponios benevolentia, ut numero et litteris illud refloreat, effcito, et si



22 qua potest, pecuniarium subsidium ampliatur. Vix credas, quanto alumni  
 23 studiorum amore magis magisque capiantur in dies singulos. Porro ex iis  
 24 multi discendi causa Romam cogitant. Sed quia id commode fieri non  
 25 potest, ut tempore progrediente in Iaponia scholam philosophiae atque theo-  
 26 logiae aperias, mentisque bonae optata perficias, petunt a te maiorem in mo-  
 27 dum. Ad hanc autem sententiam, et patres multi aggregant suam, de Ia-  
 28 ponibus, nimirum, quam possunt studiosissime bene mereri cupientes. Etenim  
 29 animadvertunt Iaponios magistros, <m2> eiusdem nationis legibus, moribus, natura  
 30 inter se atque amore devinctos, facilius in <m1> suorum <m2> animos influere, et ma-  
 31 terna lingua instructos vim maiorem ad persuadendum habere. <m1> Vale pater  
 32 optime atque humanissime, quem Deus universae Societati quam diutissime servet  
 33 incolumem. Fratres Iaponii in Philippinas pro fidei confessione relegati multam  
 34 tibi salutem adscribunt, teque ex animo observant. 4 Nonas Augusti 1615  
 35 Manilae.  
 36 Paternitatis tuae  
 37 filius minimus  
 38 †  
 39 <m2> Iacobus Yuqi

## 注解

ARSI Jap.Sin. 36.245r.

1. <m1> ] この書簡に使われている筆跡は2つある。右傾し、流れるような、連結の多い <m1> と、それとは対照的に直立し、一字一字几帳面に書いている <m2> である。うち <m2> はディエゴ結城が後に禁教下日本より送った書簡 ARSI Jap.Sin.36.247r.-247v. のものと完全に一致するので彼自身の筆跡と断じてよいだろう。<m1> が誰の筆跡か今は確認出来ていないが、結城と関係ある日本人が秘書役であった可能性はある。例えばミゲル・ミノエスが1627年にマドリッドより発した書簡 (ARSI18.I.76r-77v) の筆跡はかなり似た印象を与える。ただミノエスが1615年8月マニラにいたか確認出来ないし、彼の発した日付不明の別書簡 (ARSI Jap.Sin.22.266r.-268v.) はまた筆跡が異なる。また <m2> は単に引用箇所であることを示すための字体の変化であり、同一人物（つまり結城）が二つの字体を使い分けているという可能性もある。今後の調査に期待したい。
- 2-3. Patri Claudio Aquae Vivae Generali Societatis Iesu] クラウディオ・アクアヴィーヴァ (1543-1615) は1581年より5代目イエズス会総長の座にあった。東インド巡察師ヴァリニャーノの友人であり、原マルチノの演説でも名が出てくる（渡邊 (2012) 6等）日

本イエズス会にとって馴染み深い人物である。またディエゴ結城と同時に列福され、しばしば比較される岐部カスイの号もアクアヴィーヴァ(=「生きた水」?活水?)にちなんだものという説がある(五野井(1997) 82)。ただアクアヴィーヴァはこの書簡が書かれる半年以上前、1615年1月31日に死去している。そして当時では珍しくないことだが死去の情報が東アジアに伝わるのは遅かったらしく、上に引用した1616年7月のレデスマ書簡もアクアヴィーヴァ宛になっている。

6. nova Christi vinea]「新たなキリストの葡萄畑」。信者を葡萄に例えるのはヨハネ福音書 15.1-6にもみえるように一般的なキリスト教モチーフである。
- 7-11. pars iam...numerantur in poenis]この箇所は三世紀のカルタゴ司教キュプリアヌスの書簡にある文言を多少短くして引用している。しかも Migne の校訂テキストより 16 世紀に流通していたテキストに近いようである。PL Vol.4:415: ...ex vobis pars iam martyrii sui consummatione praecesserit meritorum suorum coronam de Domino receptura, pars adhuc in carcerum claustris sive in metallis et vinculis demoretur, exhibens per ipsas suppliciorum moras corroborandis fratribus et armandis maiora documenta, ad meritorum titulos ampliores tormentorum tarditate proficiens, habitura tot mercedes in caelestibus praemiis quot nunc dies numerat in poenis; Cyprianus (1589) 197: ...ex vobis pars iam martyrii sui consummatione praecesserit, meritorum suorum coronam de Domino receptura, pars adhuc in carcerem claustris, sive in metallis et vinculis demoretur, exhibens per ipsas suppliciorum moras corroborandis fratribus et armandis maiora documenta, ad meritorum titulos ampliores tormentorum tarditate proficiens, habitura tot mercedes in caelestibus praemiis, quot nunc dies numerantur in poenis.
- 8-10.pars...pars...pars]「一部は…別の者達は…また別の者達は」OLDs.v.pars3b 等。古典的な用法である。対応する動詞はここにあるように単数の場合もあるし、複数にされる場合もある。
- 12-13.eo...miseriarum, ut...habeant]「彼等はあまりに悲惨な状況に追い込まれており、生きる糧すら得られないほどだ」。OLDs.v.eo<sup>2</sup>2。下 v.8-9 と似た、接続法を使う構文。こなれたラテン語作文能力を感じさせる。
13. quae dei gratia est]「神の恩寵のお蔭で」。OLDs.v.qui<sup>1</sup>12a。
- 17-v.17. いわゆる長崎教会分裂について、ディエゴ結城が自身の属するイエズス会の立場より描写している。1614年2月に死去した府内司教セルケイラの後任をめぐってイエズス会とスペイン系托鉢修道会が争ったこの教会分裂については高瀬(1993) 176-184 参照。
17. omnia grata; una re minus]「全て良くいっています; ひとつのことを除いては」。ベルギーの人文学者ユストゥス・リプシウスの書簡に似た表現がある(Grata fuerunt, una re minus: Lipsius (1609) 442)。

17. (ut rem tibi dicam) ]「はっきり言ってしまうと（または、本題に入ると）」。これもリプシウスの書簡に特徴的な言い回しである。Lipsius (1609) 256、337、449等。
- 17-18. Franciscani, una cum sui similibus alterius ordinis fratribus]「フランシスコ会士達は、自分達と似たもう一つの修道会の会士等と共に」。当時長崎でイエズス会と競合していたのはフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会である（高瀬（1993）176-177等）。うちアウグスチノ会はイエズス会と比較的良好関係であったらしいので、alterius ordinisと婉曲に表現されているのはドミニコ会か。三会すべてフィリピンを経由して来たスペイン系托鉢修道会で、ヨーロッパにおける歴史はイエズス会より格段に古いが、ポルトガル主導の大航海時代に便乗して先にインドから日本に来ていた後者からは邪魔な新入りのように見られることもあった。
20. nihil non]「全て」。いわゆる litotes（緩叙法）という修辞技法。Smyth§3032。結城の別書簡では nullum non lapidem という表現もある（ARSI Jap.Sin.36.247r.14）。
- 25-28. Incitare...inflammare...terrere...confingere...captare...flagitare]いわゆる歴史的不定法。凝った文体である。
29. Quid plura? ]「これ以上何を言おうか？」キケロ等でお馴染みの praeteritio、または paraleipsis（暗示的看過法）という修辞技法。Smyth§3036。
- 30-31. distribuere piaculares Beatae Ioannae globulos cum codicillis indulgentiarum a fide alienarum]「福者ヨハannaの数珠を、信仰より乖離した贖宥状と共に配っている」。
31. debacchari]ここでは「騒ぎ立てる」といったような意味で使われているが語源的には酒神バックスの名より生じた動詞で、どちらかというところ詩的で稀な言葉ではある。
34. divisum, distractum]接続詞が抜けているのが意図的なのか単なる見落としなのか今一つ判断できないが、前者ならば asyndeton（接続詞省略）という修辞技法になる。Smyth§3016。
- 35-36. tantum abfuit, ut...probarent, ut...accusarent]「我々の側が為していることを良民がより低く評価するということはなかったのであって、それどころか、他の修道会を（良民は）強く非難するほどであったのである」。Tantum abest...ut...utは近代ラテン語でもそれほど見慣れない込み入った用法ではあるが、キケロ等古典散文家で例がある。OLDs.v.absum5 参照。
38. nec iniuria]「そしてこれは誤っていない」。nec/neque iniuria（奪格）で終わる文はキケロ等でもお馴染みのもの。OLDs.v.iniuria3b。
39. alio]「別の場所・人達の許へ」。OLDs.v.alio1。
43. movendi tamen nobis stomachi gratia]「にも関わらず、我々を苛つかせるために」。OLDs.v.stomachus4。



- 4-5. solet exsistere]Cic.Arch.14にみえる文末solere exsistereを思い起こさせる。Cic.Arch.とイエズス会のラテン語教育については渡邊 (2012) 8等参照。
8. At haec varietas ordinum]「しかし、この修道会の多様性は」。手稿では文の始まりはAd haec...とはっきり読め、原田氏も手稿の読みを採用する意見のようである (私信)。こちらの読みだと、「これら (の事柄) に加えて、修道会の多様性は…」という意味になる。ここではディエゴ結城がAt haecと口述したのを書記が有声音の同化でt→dと変換してしまったと解釈した。
- 8-9. eo...quo]OLDs.v.eo<sup>3</sup>2。上r.12-13も参照。
- 9-10. multiplices ethnicorum sectas exprimit]「多様な異教徒達の教派を写し出している、～教派と似ている」。OLDs.v.exprimo6。要するにカトリック内の修道会同士で争っているという状況は、日本人には異教のまとまりのなさと同じではないかという印象を与えるので好ましくないということ。
11. bonzii]仏僧 (坊主) のこと。キリシタン時代のラテン語ではよく見かける言葉。NLWs.v.bonzius 参照。
- 12-13.quod Angli...inculcant]イギリス人の三浦按針ことウィリアム・アダムスが1600年日本に漂着し、徳川家康に召し抱えられてカトリックの侵略性を彼に説いていたことは有名である。
- 16-17. de Philippinarum statu et de missione Sinarum]「フィリピンの情勢、そして中国の布教についても」。当時は江戸幕府が海外侵略を企てるような懸念があったのだろうか。秀吉の朝鮮侵略の記憶も影響しているかと思われる。
17. actum esse tibi persuadeto]「もうお終いであると心得よ」OLDs.v.ago21
- 18-39.チースリク (1995) 34-35に翻刻、一三〇-一三一に翻訳がある (が、一部欠落や本テキストと異なる読みがある)。
18. missum non faciam]「私は黙ってはおきません」。OLDs.v.mitto5。
21. numero et litteris]「数と文学において」、要するに学生数においても学習内容においても再度充実させたいということ。いわゆる hendiadys (二詞一意) なる修辞技法。Smyth§3025。
- 21-22.si qua potest]「もし何らかの方策があるならば」。OLDs.v.qua9。
24. multi discendi causa Romam cogitant]チースリク (1995) 34は違う推測をしているが、このようにはっきり読める。discendi causa、「学びのため」というくだりは、岐部カスイ等国外追放に遭った日本人神学生や同塾達が、既に他所で指摘されている通り、滞在先で十分な教育を受けられず不満を感じていたことをうかがわせる (五野井 (1997) 98-99等)。当箇所の全体の意味は「大勢の者達は、学びのため、ローマのことを考えている」または「…ローマに行くことを考えている」。Romamはcogitantの直接目的語と

も解釈しうるが、個人的には *ire vel sim.* の省略をとまう、行き先を示す語形であると理解するほうがしっくりくる (OLDs.v.*cogito*6a)。

25. in Iaponia]このようにはっきりと読める。ディエゴ結城はフィリピンではなく、日本での対日本人イエズス会教育事業再興を望んでいたらしい (チースリク (2004) 210-212 と結城 (2008) 62-63 を対比)。

27. suam]sc. sententiam.

28. quam possunt studiosissime]「可能な限りの懸命さで」。OLDs.v.*quam*7。

29-30. eiusdem nationis legibus, moribus, natura inter se atque amore devinctos, facilius in suorum animos influere, et materna lingua instructos vim maiorem ad persuadendum habere]「彼等は同民族の法、慣習、性質、そして愛情で相互繋がりあっておりより容易に同胞の心にとけこみますし、(同民族の) 母語も習得しており、説得に際しより大きい力を有するのです」。構文が接続法を伴う従文から対格 + 不定形の間接話法に変えられてはいるものの、ほぼ同じ表現が1587年刊のリバデネイラ著『ロヨラの生涯』にみえる (...sic enim fore, ut eiusdem nationis legibus, moribus, natura inter se atque amore devincti, facilius in eorum animos influant, et materna lingua instructi, vim maiorem ad persuadendum habeant: Ribadeneira (1587) 378) リバデネイラはここでロヨラによるドイツコレジヨ (Collegium Germanicum) の設立について語っているのであるが、結城が同箇所を日本校設立を勧めるため流用しているのは興味深い。

## まとめ

筆者がこの結城ディエゴの書簡を読んでみて改めて感じるのは、ほか複数のラテン語文書を遺したキリシタン日本人と比較しても、彼が特に語彙や構文に注意をはらい、古典を含む様々な文献の読書経験をその作文に反映させ、ある意味学術的な別な言い方をすれば優雅で教養を感じさせる書き方をする人物だったということである。若者らしい情熱と共にある種未熟さを感じさせる原マルチノの演説、あるいはペドロ岐部カスイの気宇壮大ではあるが綴りや構文で少々粗が目につく書簡とも違う結城の個性らしきものが、ここで取り上げた文書からも垣間見えるのではないだろうか。

ただこの書簡の研究も、またキリシタン日本人が書いたラテン語の調査も、まだまだ始まったばかりである。例えば本稿ではほんのヒント程度でしか触れられなかったものに、結城の書簡に反映させられている彼の読書・学習体験がより具体的に如何なるものだったかという問題がある。少なくともキュプリアヌスの書簡とリバデネイラの『ロヨラの生涯』を彼が何処かで目にしていることは間違いないが、マカオやフィリピンのイエズス会の蔵書録を調査出来ればこのような接触の可能性はより限定され確実なものとなりうるだろう。またキュプリアヌスはローマ帝国内でのキリスト教迫害の最中で様々な意見を述べ、それが後世に伝えられたわけだが、結城が彼の書簡を学習しているということは（よく言

われているように<sup>18)</sup> キリシタン時代の日本人が初期キリスト教徒達と自分達を重ねて見ていたということの一つの証左といえるのだろうか。さらに、古代より始まるキケロやセネカの書簡文学の伝統がルネサンス以降もエラスムス、ムレトゥス、リプシウスといった著名な人文学者達によって引き継がれ発展させられたことは知られているが<sup>19)</sup>、結城や岐部カスイが、印刷公表されてもさほど違和感を感じられない（実際岐部のものは当時の印刷物に引用されている<sup>20)</sup>）ほどのラテン語書簡を作したということも、この西ヨーロッパの人文文化伝統が東アジアにまで（一時的にせよ）広がっていたということを意味するのではないだろうか。ただ具体的に結城がたとえばリプシウスの書簡を読んでいたのか、そうだとしたらどの版のどの書簡なのかといったレベルまでに今回は調査を進められなかった。今後、筆者あるいは別の研究者が結城および他キリシタン日本人ラテン語作文者のテキストを起点に古典受容の経路を更に掘り下げていけることを期待したい。

## 参考文献

〈一次文献・参考書・辞書等〉

Cyprianus (1589) *Cypriani Opera*. Antwerp

Lipsius, J. (1609) *Justi Lipsii Epistularum Selectarum Chilias*. Avignon

PL=Migne, P. (1844-1864) *Patrologiae Cursus Completus, Series Latina*. Paris

NLW=Ramminger, J. (2004-) *Neulateinische Wortliste*

〈[http://www.lrz.de/~ramminger/neulateinische\\_wortliste.htm](http://www.lrz.de/~ramminger/neulateinische_wortliste.htm)〉

OLD=Glare, P.G.W. et al. (1982) *Oxford Latin Dictionary*. Oxford

Ribadeneira, P. (1587) *Vita Ignatii Loiolae*. Antwerp

Smyth=Smyth, HW. (1929) *Greek Grammar*. Harvard, MA

〈日本語二次文献〉

浅野啓子ほか（編著）（2006）『教育の社会史—ヨーロッパ中・近世—』知泉書館

逸見喜一郎（2000）『ラテン語のはなし—通読できるラテン語文法』大修館書店

尾原悟（1998）『ザビエル』清水書院

風間喜一（1998）『ラテン語とギリシア語』三省堂

---

18 米井（1998）等。

19 根占（2006）142-143等参照。

20 すなわちメキシコで1631年に印刷された本に岐部カスイのラテン語書簡原文がスペイン語訳付で引用されている。チースリク（1995）90-94等参照。



- 片岡千鶴子 (1969) 『八良尾のセミナリヨ』キリシタン文化研究会
- 桑原直己 (2009) 「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」、『哲学・思想論集』34:144-129
- 五野井隆史 (編) (1997) 『大分県先哲叢書ペトロ岐部カスイ』大分県教育委員会
- 菅原憲二ほか (編) (2005) 『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』京都大学学術出版会
- 高瀬弘一郎 (1993) 『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで』岩波書店
- 米井力也 (1998) 『キリシタンの文学—殉教をうながす声』平凡社
- チースリク、H. (1965) 「日本における最初の神学校」『キリシタン研究』10:1-66
- チースリク、H. (監修)、五野井隆史 (編集) (1995) 『大分県先哲叢書ペトロ岐部カスイ資料集』大分県教育委員会
- チースリク、H. (2004) 『キリシタン時代の日本人司祭 (キリシタン研究41)』教文館
- 西田幾多郎 (1923) 「ケーベル先生の追懷」『思想』23:32-33
- 根占猷一 (2006) 「フマニタス研究の古典精神と教育—イエズス会学校の誕生頃まで」朝野ほか:125-148
- 原田裕司 (1998A) 『キリシタン司祭後藤ミゲルのラテン語の詩とその印刷者税所ミゲルをめぐって』近代文芸社
- 原田裕司 (1998B) 『ラテン語が教えるもの』近代文芸社
- 水野サダ子ほか (編著) (2009) 『ラテン詩人水野有庸の軌跡』大阪公立大学共同出版会
- 列福式公式記録集編纂委員会 (編) (2009) 『ペトロ岐部司祭と187殉教者列福式—公式記録集』カトリック中央協議会
- 三木計男 (2007) 『ディオゴ結城了雪と阿波公方』三木計男
- 結城了悟 (2008) 『殉教者ディオゴ結城了雪—1574-1636—他人のために生きた人』日本二十六聖人記念館
- 渡邊顕彦 (2012) 「原マルチノのヴァリニャーノ礼讃演説—古典受容の一例として—」、『大妻女子大学比較文化学部紀要』13:3-19

〈欧文二次文献〉

- Burnett, C. (1996) “Humanism and the Jesuit Mission to China: The Case of Duarte de Sande (1547-1599).” *Euphrosyne* 24:425-470
- Garcia, A.C. and M.D. Alonso Saiz (2006) *Acta Selecta X Conventus Academiae Latinitati Fovendae (Matriti, 2-7 Septembris 2002)*. Rome
- Ijsewijn, J. (1990) *Companion to Neo-Latin Studies Part I: History and Diffusion of Neo-Latin Literature: Second Entirely Rewritten Edition*. Leuven
- Palmer, L.R. (1954) *The Latin Language*. London

Schütte, J.F. (1968) *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650*. Rome  
Waquet, F. (J. Howe trans.) (2002) *Latin: or the Empire of a Sign*. London

## **Yūki Diego's Epistle to Claudio Aquaviva Dated August 2 1615 (ARSI Jap.Sin. 36.245r.-246v.): The Original Latin Text with Commentary**

The present contribution offers a transcript of a manuscript letter written by the Japanese Jesuit and martyr Yūki Diego (1574?-1636) together with a linguistic and historical commentary. The article also includes an introduction on the history of the Latin language, especially its use in the non-West, and a brief biography of Yūki. The conclusion points out the need to delve further into receptions of the Church Father Cyprian of Carthage, Ribadeneira the biographer of Ignatius Loyola, and possibly of humanist epistolary literature twchich are tentatively identified in the commentary.